

いと思っていた。

だが、今は違う。

目の前にいるこのみは、自分だ。

他人ではない。

そして、それがどうしようもないくらい愛

らしい。

このみが自分であつて。

自分がこのみであつて。

嬉しいこともひとつで。

たった一つのことを思っている、一つの存

在となった。

「そうだな、ひとつだ」

単純な呼応。

それだけでよかった。

もう既に確かめ合っているのだから。

「じゃ、動くぞ……」

貴明は、ゆっくりと引き抜き、また挿入^いれる。

「ふああ、タカくん……」

このみの声と身体を確かめながら、貴明はその反復運動を徐々に早めていく。

「んっ、ふあっ、たっ、タカくん、タカくん！」

このみの口から漏れる言葉に意味はなかった。

だが、貴明はその表現を受け止めた。

「あっ、あっ！ タカくんが、動いて！ あ

ああっ！」

その小さな身体から発せられる艶声。

存在を確かめ合った二人だけの言葉。

このみを感じている。

それはつながっている部分だけではなく。

このみの声も。

このみの匂いも。

このみの汗も。

このみの温度も。

全て感じる事が出来た。